

# 私のおすすめ

## Movie II

高橋泰英

高橋皮膚科クリニック（横浜市中区）

今年も私のおすすめ映画をいくつか、お役に立てるといいのですが。昨年公開のものが中心で、いずれもDVDレンタル可能です。

### 『特捜部Q 檻の中の女』

デンマークのベストセラー・ミステリー小説の映画化。終始陰鬱な北欧の雰囲気、ミステリーにぴったり（マイアミだとアクションになってしまいます）。刑事二人のコンビネーションが絶妙です。大量の写真から解決の糸口を得るのは、同じ北欧の『ミレニアム ドラゴントゥーの女』を連想させます。こちらもおすすめですが、スウェーデン版を見てください。ハリウッド版では肝心の写真のシーンがありません。

### 『ハドソン川の奇跡』

離陸後まもなくエンジン不調でハドソン川に不時着し、一人も犠牲者が出なかった事件の映画化。クリント・イーストウッド監督の職人技が楽しめます。同じ場面を繰り返したり、頻繁に現在と過去をフラッシュバックするのが全く煩わしくなく、とても効果的です。主演のトム・ハンクスは安定感抜群、この人が出ている映画は外れが少ないです。副機長役のアロン・エッカートもいい味を出していて、最後のジョークに色々な想いが込められていて印象的でした。

### 『ブリッジ・オブ・スパイ』

冷戦時代に、アメリカとソ連の間で捕虜になったスパイの交換が行われた実話。交渉役となった弁護士には、これもトム・ハンクス。彼の演技もさることながら、スパイを演じた英国の舞台俳優マーク・ライランスが、こんなんでも俳優になれるの？というくらい地味なのに半端ない存在感です。サスペンスですが人間ドラマの一面も強いので、この二人でないとこの映画は成立しなかったでしょう。

### 『愛しき人生のつくりかた』

夫を亡くした老婦人と、定年退職した息子、心が離れかけているその妻、祖母思いの孫、という家族の日常のちょっとした事件を描いています。フランス映画は暗く地味で私には理解できないことも多いのですが、これはちょっと軽くて温かい後味のいい映画です。端役の人まで神経が行き届いていると、その映画は成功ですね。

### 『オデッセイ』

火星に一人取り残された植物学者が、創意工夫で助けを待つという話。この創意工夫が実に面白い。科学知識・技術を駆使したロビンソン・クルーソー物語。ただし後半の救出のシーケンスはやや大雑把になったようで残念です。

### 『ザ・ビートルズ ～EIGHT DAYS A WEEK』

ビートルズのライブステージを追ったドキュメンタリー。ファンにとっては涙モノ、そうでない人もそれなりに楽しめるのでは。

## 『弁護人』

元大統領ノ・ムヒョンが若き日の弁護士時代に扱った、軍事政権下の冤罪事件を描いています。主演は私のご最良俳優ソン・ガンホ。だらしがないけど愛すべき男、でもやる時はやる！という役が得意ですが、この映画もその典型。彼が気に入ったら、是非『義兄弟』（やくざ映画ではなく北朝鮮のスパイと元韓国情報部員の人間ドラマ+アクション）も見て下さい。

## 『バクマン』

高校生コンビが少年ジャンプ連載を目標に奮闘する一種のスポコンもの。漫画が完成するまでの描写がCGを駆使して描かれる。こういうCGの使い方もありだなと思いました。二人を演じた佐藤健と神木隆之介は若手俳優の中でも特に輝いているし、仲間でライバルの漫画家達も個性派ぞろいで良かったけれど、マドンナ役の小松菜奈（本人よりそれを描いた絵）に惹かれました。サカナクションの音楽も聞きもの。

## 『海よりもまだ深く』

家族の関係を描いてきた是枝裕和監督の最新作。売れない小説家（阿部寛）がひとり暮らしの母（樹木希林）、別れた妻（真木よう子）、一人息子（吉澤太陽）と台風の夜に母の団地に泊まることになる。久々に共に過ごした濃密な一夜で、家族の絆は回復するのか？ 阿部寛のダメ男ぶりにイライラしながらも、どこか突き放せない可愛らしさを感じてしまいます。吉澤太陽は子役でこんな抑えた演技ができるのは珍しい。樹木希林ほどの映画のどんな端役でもふわっとした存在感に魅了されます。『あん』での永瀬正敏との共演は絶品です。

## 『残穢 一住んではいけない部屋』

ホラー雑誌の読者からの投稿を短編小説にまとめる仕事をしている作家（竹内結子）が、読者の女子大生（橋本愛）から「住んでいるマンションの部屋で異様な物音がする」と相談を受けて調査をするうち、音の正体や原因が徐々に明らかになっていきます。この調査が丹念に描かれていて前半はホラーというより探偵ものの様相ですが、コケ脅しに怖さを煽らないところが却って後半の盛り上がりにつながっています。ホラーで問題なのはその正体をどう現わすかで台無しになったりするのですが、この映画はぎりぎりセーフだと思います。

## 『コードネーム U.N.C.L.E.』

東西冷戦時代のCIA諜報員ソロとKGBのクリアキンが手を組んで、謎の組織の核開発を阻止するスパイもの。この二人の名前にピンと来た人は還暦過ぎでしょうか。かつてのテレビドラマ『0011 ナポレオン・ソロ』のリメイクです。ただそんな予備知識は全く不要。あまりCGを多用しないアクションと騙し合いを楽しんでください。見終わった後には何にも残りません。これは誉め言葉です。

## 『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』

ハリウッドに「赤狩り旋風」が吹き荒れていた時代に、映画界を追われた脚本家ダルトン・トランボの半生を描いた伝記映画。こんな目に合うと政治運動に走る人もいると思いますが、彼は根っからの職人脚本家。生活のため、家族のため、何より自分のもっとも得意な仕事を続けたいために偽名を使って脚本を書きまくります。偏屈なのに家族からも仲間からも愛される人物像に憧れます。トランボと聞いてすぐにわかる人はかなりの映画通でしょうが、『ローマの休日』の脚本家といえば「へーっ」と思われるかもしれません。元々映画を観るのにいちいち脚本家を気にする人は珍しいと思いますが、この映画を観ると脚本がいかに大切かということがよくわかります。日本でもハリウッドでもいいオリジナル脚本がないため、アニメやアメコミを原作としたものがやたらと多いのが最近の傾向です。

## 『神様の思し召し』

天才的心臓外科医だが、傲慢で家族や周囲とうまくいかない男と、カリスマ性があり若者に絶大な人気の神父。何のつながりもなかった二人だが、医大生の医師の息子が突然「神父になりたい」と宣言したことから、“前科者”と噂のある神父の正体を暴露しようと医師が奔走する。イタリア映画では時々こういうコメディタッチの佳品に巡り合います。かつてのビットリオ・デ・シーカ監督の作品など、年配の方にはファンが多いのではないのでしょうか。陽気な笑いの中に人生の深みや哀しみを感じさせるイタリア映画の笑いは、他の欧米のそれより日本人にとってわかりやすい気がします。